



### 目標

今年七月、プロ野球、埼玉西武ライオンズの松坂大輔が現役引退を発表した。いまの小中学生で彼を知っている人はよっぽどの野球好きくらいだが、私世代の野球少年にとっては憧れのスーパースターであり、誰もが知る存在であった。

甲子園春夏連覇、夏の甲子園決勝でのノーヒットノーラン、高卒ルーキーイヤーからの三年連続最多勝、WBC(野球の世界大会)二大会連続MVP、ポストンレッドソックスでワールドチャンピオンなど、彼の輝かしい功績を挙げればキリがない。一九九八年以降の野球界は彼を中心に回っていたといっても過言ではないかもしれない。

「目標がその日その日を支配する」

これは松坂大輔が座右の銘としている言葉である。私はこの言葉が大好きだ。もともとは社会運動家の後藤静香(ごとうせいこう)という人が書いた「権威」という詩集の「第一步」という詞の一節からきている。せつかなので全文を紹介しよう。

#### 「第一步」

十里の旅の第一步 百里の道の第一步  
 同じ一歩でも覚悟が違ふ 三笠山に登る第一歩  
 富士山に登る第一歩 同じ一歩でも覚悟が違ふ  
 どこまで行くつもりか どこまで登るつもりか  
 目標がその日その日を支配する

どうだろう。私はこの詩を何度も読み返し、今では暗唱できるようになっている。この詩が言わんとしていることを、受験に挑むキミや、定期テストに臨むキミや、検定取得を目指すキミや、部活で活躍

したいキミや、夢に向かって努力するキミに感じてほしい。考えてほしい。そして一歩、行動に移してほしい。そう強く願っている。

現状の自分の行動に目標を合わせるのではなく、もつとワクワクするような目標を立てよう。目標は高すぎると霞んで見えなくなってしまうし、低すぎると胸が躍らない。自分がワクワク出来る、頑張ったら達成できそうな目標を設定しよう。目標を設定出来たら次は行動計画を立てよう。ゴールから逆算して今日一日の自分の行動を決めよう。目標をクリア出来たら次へ。そして、また次へ。自分で目標を設定し、自分の行動をコントロールし、結果を振り返って目標や行動を修正する。このサイクルが習慣化できたとき、きつとキミは何だってできるし、何にでもなれるだろう。(高寺)



### 「黒」の反動

第二次世界大戦後に日本人によって考案され、今ではボードゲームの世界的定番となったオセロ。高校受験を控えた中学三年生のとき、私はオセロの世界にどっぷりとハマっていくことになる。

朝も七時には登校しオセロを開始、親友のAくんと放課後も夜遅くまで対局し続けた。おかげでオセロの実力はついたが、それとは反比例して模試の成績は下がっていった。(勉強していないので当然だが……)

勉強しなければいけないと分かっていたが、塾にも通っていない私は何をどう勉強してよいのかが分からずに、オセロに没頭することで現実逃避していたのかもしれない。本当は誰かに救いの手を差し伸べてほしかったのだと、今なら分かるが……。

一方で勉強しない私にイライラする母。高校の進路を決める三者面談を目前にしたある日、私は母と

大喧嘩をした。そこから中学卒業まで母とは一切口をきかなくなった。母が作る食事もなく食べなくなった。エスカレートして暴言を吐き、ときには唾を吐くことさえあった。私の暴拳を止めようと、父と大学受験を控えた兄とも何度もぶつかった。家庭崩壊寸前。そんな中、私の心の中にあつたもの。それは「家族なのに誰も助けてくれない」という孤独感だけだった。(唯一母方の祖母だけが心の拠り所になって、何度も何度も飯を作ってくれた。)

それからも家族に対して感謝の気持ちを感じることもなかなかできなかったのだが、大学生のとき誕生日プレゼントと一緒に送られてきた一通の手紙で価値観が一八〇度変わることになる。「お母さんが生まれてこられたことにも感謝。あなたが生まれてきてくれたことにも感謝。」読んだ瞬間、まるでオセロの黒の列が音を立てて全部白



にひっくりかえるようだった。愛されていなかったのではない。自分が愛されていることに気付けなかっただけなのだ。その場で泣き崩れたことを今でも覚えている。

非情な振る舞いをしてきた私に「生まれてくれてありがとう」と言ってくれる母。食べないとわかっただけなのに毎日欠かさず食事を作り続けてくれた母。学費を捻出するためにおしゃれもできなかった母。塾講師に就職が決まったとき、私は複雑な気持ちだった。裕福ではないながらも、膨大な学費をかけてもらいながら、大学で専攻した建築の道へ進まなかつたことに後ろめたさを感じていたからだ。それでも、重い口を開き、母に就職が決まった旨を伝えると、「自分のやりたいことが見つかったのならよかったじゃない。」と喜んでくれた母。

塾講師として社会人になってから数年後に母方の祖母が亡くなった。死に化粧をした祖母の傍らに座

っていると、涙をこらえきれなくなった。家族の中で居場所を失っていたあのとき、心の拠り所になってくれた祖母。家ではご飯を食べない私に、何も語らずに温かいご飯を作ってくれた祖母。祖母には三人の娘と一人の息子がいるが、次女である私の母にのみ介護を託していた。母は母だけではない。祖母にとって大切な娘でもあったのだ。祖母は母が生まれたときに、娘にどんな夢を抱いたのだろうか。よもや自分の可愛い娘が、睡眠薬を飲まないで眠れないくらい辛い日々を送ることになるなんて、夢にも思っていなかっただろう。娘を苦しめている諸悪の根源である孫のために、祖母はどんな想いでご飯を作ってくれていたのだろうか。「ばあちゃん本当にごめん……。」また母を苦しめていたことを改めて知り、それでもなお「お母さんが生まれてこられたことにも感謝」と言ってくれる母の手紙の言葉も思い出され、余計に涙が止まらなくなった。

今までずっと愛情を注いでくれていた母に対して自分がしてきたことを思うと空恐ろしくなる。親たることに文字通り、命懸けで私と向き合ってくれた家族を私は無条件で尊敬する。そのために私は家族からどれだけ多くのものを奪ってしまったのだろうか。そう思うと申し訳ない気持ちでいっぱいになる。同時に、不満や悩みが大きかった分、今では感謝の気持ちも大きい。もしも中学時代の「黒い過去」がなかったとしたら、この計り知れない感謝の気持ちは生まれてこなかったかもしれない。

過去の事実を変えられないが、意味づけは変えられる。人生はオセロに似ているように思う。人は生まれたとき、誰もが祝福の「白」を渡される。多くの人の人生は「白」の駒から始まる。しかし、そのあと、自分が恵まれていないことを知ったり、嫌なことを経験したりすると、黒い駒がどんどん置かれ

